
NatureGirl RGB +A

園夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N a t u r e G i r l R G B + A

【Nコード】

N 6 3 2 0 Z

【作者名】

園夢

【あらすじ】

天利京一は皐月高校3年生。何の面白みもない彼の生活が、やたらと不思議で個性豊かすぎる娘達によって彩られる。短編「水面魔法」とちよつと繋がる、「自然のモノ」の「擬人化」ちゃんたちはなし。

Day - 1 水面魔法（前書き）

こんにちは園夢です。

今回は、もしかしたら前作「水面魔法」を読んでいたからの方が

内容の理解がしやすいお話かもしれません。

いやまあ、小説自体理解しにくいという文才皆無の残念クオリティですけどね

あとこの話には「擬人化」要素が溢れ出るほど含まれております故
苦手な方は今すぐにブラウザバックを。

大丈夫、という方には是非楽しんでいただけたら幸いです。

Day - 1 水面魔法

俺は放課後、学校のプールへ走る。
決まった時間にそこへ着くように。

学級委員というやつは無駄に多忙だ。

しかし今ではその多忙さに感謝さえしている。

この時間まで、学校に居れるんだから。

俺はまた、薄暗い中フェンスを越えて、6時25分を待つ。

その時間が、きた。

「よっ。来たぜ」

「来てくれたんだね、嬉しいよ」

「毎日来てるだろ？それ言うの何回目だよ」

「何回だろう。覚えてないや。まあ、嬉しいのはホントだしね」

他の奴らがこの状況を見たら、目を疑うだろう。

俺はプールの外にいる。

俺が話している「彼女」は、プールの中にいる。

「彼女」は・・・一言で言えば、『水自体』。

『水』という自然の物質が人間のかたちをしているというか、

いやそれでも人間の時はしっかり外見も人間だから・・・

・・・説明がうまく出来ない存在なのだ。

「彼女」とは、どのぐらいだろう、4、5ヶ月前くらいだろうか、
初めてここで会った。

会ったというか、俺が偶然「彼女」を発見しただけなのだけれど。

その時俺は、少しばかり不思議な体験をした。

「彼女」に手を引かれ、プールの水を通して、

全く別の、俺が夢見たような場所に連れて行ってもらった。

「彼女」には、水から水へ移動するゝ能力<のようなものがあるらしい。

しかも、どんな場所にどんなに長く居ても、時間が経っていないのである。

「京一きやういちってさ、もうそろそろ3年生じゃないっけ？」

「ああ・・・そうだな、来月からだ」

「もう学級委員じゃなくなっちゃうよね。ここ来るのきついかなあ？」

天利京一あまじきやういち（つまり俺）は、来月・4月からこの皐月高校の3年生になる。

そうになると、この学級委員という立場ではなくなってしまう可能性があるがある。

簡単に言えば、「彼女」と会う時間まで学校に居られないということだ。

正直に言えば今の今までそのことを忘れていた訳だが。

「うー・・・ん、どうするかなあ・・・」

「まー私もそれなりに考えてみるよ。で、今日はどこへ「潜り」に行く？」

「潜る」とは、「彼女」の力でいろいろな場所に行くことを言っている。

まあ実際水中のはずなのに水の抵抗がほとんどなかったり、水中なのに歩いている感覚だったり、

普通に呼吸ができたり、帰って来たとき服が全く塗れてなかったりとおかしいことだらけで、

「潜っ」ている感じではない。でも「潜る」と言っている。それなりのノリってやつだ。

「えつとじゃあ・・・あ、昨日行ったところ、また行ってみていいか？」

「おっけー！じゃー行こーう！」

「彼女」に手を引かれ、俺はプールに飛び込む。

だいたいここ数ヶ月変わらない放課後。

3学期が終わり、春休みも明けて、遂に俺は3年生になった。

新学期初日の朝、俺は変わった出会いをした。

まるで、「彼女」と会った時のような

Day - 1 水面魔法（後書き）

第一話、いかがでしたでしょうか。

個人的にはとりあえず「文章を書く」というところで結構精一杯や
ってます（え

楽しんでいただけたなら幸いです。

次回、>増えます。<

Day - 2 三人娘（前書き）

こんにちは園夢です。

今回は前作では出てこなかった子達がでてきます。

外見設定はしてあるのですが、ここではとりあえず文から想像してお楽しみ下さい。

いずれはブログかpixivにキャラ設定upしようと思ってます。今回も最後まで読んでいただければ幸いです。

Day - 2 三人娘

新学期、俺はいつも通り登校してきた。

「天利君、おはよー」

「京、はよー」

まあ、3年生になっても、クラスの面子は変わらない。

みんなは普通に挨拶してくれるし、俺も挨拶する。

というかこの皐月高校自体生徒数が少なめなので、基本誰とでも挨拶するのだ。

・・・今日会った、その子以外は。

俺が正門近くまで来たとき、いきなり目の前に女の子が現れた。

その子は真顔のままだったが、現れる直前の音と髪についた葉で分かった。

彼女は門の近くに生えている木から、落ちてきたのだ。

落ちたといっても着地はしっかりしていたから「降りてきた」の方があっているかもしれない。

急すぎる出来事にただ驚くしかできなかった。

そして、俺は少し思ったことがあった。

水の・・・「彼女」と似ている。

膝のあたりまである緑の長髪も、長く少し太めの眉も、エメラルドの瞳も、

違うところばかりだが、なんというのだろうか。

> 雰囲気くが似ている。

そのやりとりを黙って見ていた緑の子が、いきなり口をひらいた。

「あ、やっぱりこの子だったんだね、「水」がいつつも振り回してる子って」

「振り回してるって何さー。いいじゃん、京一の行きたいところ行ってるんだしさ」

「あのねえ、普通の人間があのと能力くで移動って、常識なら考えられないよ？」

「あたし達の存在自体、常識では考えられないと思うけど？」

「私が言ったのは、「私達の」常識ってこと」

「・・・もしもーし？俺、置いてきぼり？会話結構はずんでません？
というか俺の予想は的中したようだ。」

この子は、「彼女」と同じような存在らしい。

要するに、自然の一部、といった感じが。

「あー・・・」

「え？あ、そうだ、紹介が遅れたね。この子は「風」。あたしと同じ自然のもの」

「風です。水がいつもご迷惑お掛けしてるようで・・・」

「いや、別に・・・」

「だからあー、迷惑かけてないってばあー」

とりあえず分かったのは、この子が「風」で、「彼女」の姉みみたいな人で、

「彼女」より少なからず礼儀正しい。

まあ迷惑はかかっていないのが事実。むしろ俺が救われてるようだ。

「水に誘われて来たはいいけど・・・あなた、私を呼んであの子は抜き、なんて無いよね？」

「ないない！ちゃんと誘ったから」

え、まだ増えるんすか。

賑やかになるに越したことは無いが、水、風と来て誰が来るのだから。

「あ、来た来た、炎ちゃん！」

炎？！自然っていうか・・・まあ自然か。

その子は呼ばれると急いで走ってきた。

かなりの全力疾走だったのか、すこし息があがっている。

「ちょ・・・水も・・・風さんも・・・来るの早くない?!」

「炎が遅いんだよ・・・」

「まーねー、呼んだあたしが早めに来なきゃ意味ないしねえ」

炎ちゃんの外見。釣り目で瞳は紅、短いちょっと太めの眉。

前髪の両端ともみあげ部分が長く伸び、後ろ髪は短め。

前髪の真ん中あたりはまとまっていて、すこし右に流してある。

「どんな髪型か説明しろ」と言われたら一番難しい髪型をしている。

「あなたがえつとー・・・京一？だっけ？」

「あ、うん、そうだけど・・・?」

意外と突っ込んで質問してくる炎ちゃんにおされながら言う。

「ま、あたしは水に誘われたから来てあげたまでだけど、せいぜいよろしくねー!」

ああ、あれですか。ツンデレですね分かります。

で、何故俺にツンなんだろうか・・・いやそこはいいとして、誰に
デレるんだ。

「んじゃ、まー無事合流ってことで！」

「私達は職員室ね」

「じゃあ俺は教室にいつてるか」

とりあえず4人で、生徒玄関に向かった。

Day - 2 三人娘（後書き）

いかがでしたでしょうか。

最後の「生徒玄関」ということは、本当は「昇降口」の予定だったのですが、

ぐぐったらこれ方言らしいので、なんとか代替りの言葉をねじこみました。

関西には昇降口という概念がない地域があるそうで・・・

やっぱり小説書くためには知識が必要だなと実感しました。
楽しんでいただけたなら幸いです。

次回、>決まります。<

Day - 3 固有名詞(前書き)

あけましておめでとございます園夢です。

なんだかんだで年をまたぎましたね。

今年もこんな野郎ですがよろしくお願い致します。

今回も楽しんで読んでいただければ幸いです。

Day・3 固有名詞

「あ。」

玄関に向かう途中で、俺は足をとめた。

「京一、どーしたの？」

「……いや、お前ら、転校生として来るんだろ？……名前は？」

俺の目の前で、3人の女の子がぴたりと固まった。

今まで『もの』としての名前さえあればよかった彼女たちだ。

人間のような名前を持つことなど、完全に考えていなかったらしい。

「……そうだったな……」

「ちよつと、どーすんの?!呼んだのは水でしょ、なんとかしてよ
お!!--」

「うーと、どうしよつか……名前ね……」

別に彼女だけに罪がある訳ではないと思うが……
とか考えている間に、俺の前に水がいた。

「……京一、あたしたちに、名前つけてくれない？」

「え……はあああ?!!--」

まさかそう来るとは思わなかった。

後ろの二人も、あんた何言ってるのと言いたそうな顔をしている。

……だが俺だって、せつかく増えた友達と一緒に過ごしたい。

知識もセンスもない頭をフル稼働させて考えた。

「・・・じゃあ、一応・・・案だけど、こんなでどうだ？」

水 さくまみずすず 佐久間 水月

風 しのいふうい 篠井 風羅

炎 あないはむひ 朝居 焰

「皆元々の名前が入ってるね！水月かあ・・・気に入った！」

「・・・名字と名前の差がすごい気がしなくてもないけど・・・まあいいでしょ」

「ふーん・・・ま、もらったからには使ってあげるわ、この名前」

各々の感想発表と名前の決定が済んだようなので、俺たちはまた玄関へ歩いた。

クラス分けがあるそうなので、3人は職員室へ。

俺は一人、教室に向かった。

「うーっす」

「よー天利！・・・あ、あのさ、お前さ！」

軽い挨拶をして教室に入るとすぐ、友人の西木 にしきゆうた 優斗が寄ってきた。何故か変にによよしている。

「お前さ、朝会ってたあの女の子3人、誰なわけ？」

「お前見てたのかよ！あーあれだ、知り合い知り合い。転校生だよ」

「まじすか！！え、知り合いの女の子が転校してきてそのままラブコメ展開ですか？wwww」

「どこのギャルゲだよ！！んなわけねーだろ馬鹿！！」

こいつは、付き合いをはじめた小学校時代からこんなやつだ。

2ちゃんねらーな兄の影響だろうが、すぐこっぴどい発想をする。

顔は決して悪くはないのに、どうして中身がこうなんだ・・・

しばらくして、朝のHRが始まった。

頭頂部だけ薄くなった頭は休み前と変わらないな、この先生。

「えー、今日からこのクラスの一員となる転校生を紹介する。入っていいぞー」

予想はできていたざわめきがおこる。

どうせ「どんな子だろ？」とか言っているんだろう。

だがそういう俺も、3人のうちの誰がこのクラスに来るかは知らない。

3学年は3クラスだから、多分1クラスに1人入ることになると思うのだが・・・

「・・・篠井風羅です。よろしくお願いします」

風羅がそう言うと、クラスメイト達は一斉に静かになる。

それもそうだ。風羅は「可愛い！」と騒がれるタイプではない。

落ち着いた雰囲気と美しさで皆言葉を失う・・・と表現すればいいのだろうか。

聞こえる声は「おお・・・」とか「綺麗な子だなあ・・・」とか、そういうのが多い。

「えっと。篠井の席は、西木の隣だ。あの一番後ろのあそこな。」

「はい」

机の影で、腕だけすごい勢いでガッツポーズをする西木がすぐ右にいた。

俺と西木の席は少しの間をあけて隣同士なのだ。

風羅がつかつかとこちらへ向かってきて席に着き、

「よろしく、西木君」と一声かけると、

聞いた?!今の聞いた?!?!と言いたそうに西木がこっちを見てくる。正直呆れる。

「西木も変わんないよねえ、学年変わったのに」

「人つてのはそこまですぐ変わらないんじゃないか?」

「ま、そっか」

俺と同じように西木に視線を向け呆れ顔をしている女子。

俺の隣の席の矢野^{やのなほ} 渚。西木と同じく、小学校からの友人だ。

西木の暴走を、俺と渚で見守るといづのがいつもの典型パターンになっている。

「あの子、京一の知り合いなんでしょ?手え出さなきゃいいけどねえ」

「まあ・・・風羅なら自分でなんとかしそっただけだな・・・はは」

そんなことを言っていたら、HRの終わるチャイムがなった。

Day - 3 固有名詞（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回決まった娘ちゃん達の名前は、ネットでのお友達様に考えていただきました。

マジで感謝です。

ですが、クラスメイトの西木と渚ちゃんの名前。

この二人は、書いてる途中に考えました（え

あーあー、また自分でキャラ設定分からなくなるパターンだー。

設定いつかまとめたいです。私が忘れないように。

楽しんでいただけたなら幸いです。

次回、>集まります。<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6320z/>

NatureGirl RGB +A

2012年1月12日02時49分発行